

茨城大学学報

第307号

平成25年2月～平成25年3月



理学部前の桜（水戸キャンパス）

INDEX

- ◆ いばらきイメージアップ大賞 奨励賞を受賞
- ◆ 農学部と茨城県立医療大学が連携協定を締結
- ◆ 平成24年度茨城大学地域参画プロジェクト実施報告会・審査会を開催
- ◆ 「熟議 in 茨城大学～市民協働と地域づくり人づくり～」を開催
- ◆ 教育学部で第2回附属学校フォーラムを開催
- ◆ 茨城大学と株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホックが連携協定を締結
- ◆ 「天心・六角堂復興プロジェクト」を報告
- ◆ 茨城大学東北ボランティア・ツアー ～「2年たった”いま”を感じよう」～
- ◆ 農学部主催による地域連携シンポジウムを開催
- ◆ 本学が中心となったボランティア団体に文化庁より感謝状が贈呈されました
- ◆ 平成24年度卒業式
- ◆ 平成24年度 退職者永年勤続者表彰式・懇談会を開催

茨城大学総務部総務課広報係

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ いばらきイメージアップ大賞 奨励賞を受賞

平成 25 年 2 月 6 日（水）、『いばらきイメージアップ大賞』で本学と北茨城市が取り組んだ「六角堂を中心とした北茨城市の復興まちづくり」が過去最高の 206 件の応募の中から、奨励賞を受賞しました。『いばらきイメージアップ大賞』は「いばらきのイメージアップ」や「地域の元気」につながる様々な取り組みを表彰し、県内外に PR することにより、郷土への誇りの醸成と茨城県の一層のイメージアップを図ることを目的に平成 18 年より実施されています。

東日本大震災により県内で最も甚大な被害を受けた農林漁業、観光業などの復旧・復興に向け、市民一丸となって様々な復興に取り組み、街中になぎわいを取り戻すために、本学では、津波により流出した「六角堂」を本学が中心となって創建当初の姿にいち早く再建しました。北茨城市を代表する貴重な財産・観光資源である「六角堂」の再建への取り組みが、復興のシンボルとして多くの市民に勇気や希望を与えたと評価されました。



池田幸雄学長（左）と橋本昌茨城県知事（右）

◆ 農学部と茨城県立医療大学が連携協定を締結

本学農学部と茨城県立医療大学は平成 25 年 2 月 7 日（木）、両大学がそれぞれの特色を活かして相互に連携・協力し、有為な人材の育成、研究の発展及び地域医療の充実に寄与することを目的として連携協定を締結しました。

農学部（阿見キャンパス）で行われた調印式には、茨城県立医療大学から工藤典雄学長、岩井浩一副学長、本学から田代尚弘理事・副学長、太田寛行農学部長が出席しました。

調印式では、太田農学部長が「この協定により学生達の学びの枠を広げ、学生交流が発展することを期待している。また、農学部と阿見町は小学校で食育活動の連携を展開しており、そこに医療大が入ることで更に充実したものになり、地域の教育に貢献できる」と挨拶しました。続いて、茨城県立医療大学の工藤学長が「異なる分野を専攻する両大学間で教育研究、学生交流における連携協力の体制が整った。茨大農学部と医療大附属病院との農医連携による園芸療法を更に進め、地域社会の健康と生活の質を向上させたい」と挨拶しました。

調印式には、阿見町から天田富司男町長が来賓として出席し、「阿見町と両大学とのトライアングルができ、連携関係がより強固なものとなった。両大学と一緒に明るい元気な街にしていきたい」と挨拶しました。

今後、隣接する本学農学部と茨城県立医療大学は、協定内容である単位互換、サークル活動の共同化、共同研究や地域貢献事業、図書館の相互利用について推進していく予定です。



左から岩井副学長（医療大）、工藤学長（医療大）、太田農学部長（茨城大）、天田町長（阿見町）、田代理事・副学長（茨城大）



連携協定調印式出席者による記念撮影

◆ 平成24年度茨城大学地域参画プロジェクト実施報告会・審査会を開催

平成25年2月18日（月）に、茨城大学水戸キャンパス理学部K棟インタビュースタジオにおいて、平成24年度学生地域参画プロジェクト報告会・審査会を開催しました。

本プロジェクトは、学生が主体となり、地域社会と連携した社会貢献につながるプロジェクトに対して、茨城大学社会連携事業会と茨城大学教育研究助成会が支援するプロジェクトであり、平成16年から実施され、今年で8年目を迎えます。

今年度は、昨年度からの継続となる5プロジェクトを含む、10プロジェクトの活動報告が行われ、審査員からは、年々レベルが上がっているとの意見が多く寄せられました。

報告会の後に開かれた審査会の結果、3年目の継続プロジェクトとして活動範囲や質の向上、地域からのニーズの向上が評価された「女性応援プロジェクト～がんばれ県北地区の女性たち～」が最優秀プロジェクトに、「茨城県市町村の地域振興を目指した地質情報活用プロジェクト」及び「FLEAI マーケットーエコチャリティー2012」が優秀プロジェクトに選出されました。また、最優秀プロジェクトの「女性応援プロジェクト～がんばれ県北地区の女性たち～」は、平成25年3月21日（木）に行われる学長表彰式で表彰を受けることになりました。

なお、「女性応援プロジェクト～がんばれ県北地区の女性たち～」は、3年連続での最優秀プロジェクト選出となりました。



最優秀プロジェクトに選出された「女性応援プロジェクト
～がんばれ県北地区の女性たち～」の活動報告の様子

◆ 「熟議 in 茨城大学～市民協働と地域づくり人づくり～」を開催

平成 25 年 2 月 24 日（日）に茨城大学、文部科学省、茨城県教育委員会主催による「熟議 in 茨城大学～市民協働と地域づくり人づくり～」が水戸市三の丸市民センター（水戸市三の丸）で開催されました。

これは、大学が地域との協働関係を発展させる取組として、文部科学省が平成 23 年より全国の大学に対して支援しているものであります。本学では、「地域づくり人づくり」に焦点を絞り、本学生涯学習教育研究センターが中心となって事業を計画しました。

主催者側挨拶で、初めに、池田幸雄茨城大学長が、「大学はこれまで地域振興を重点としてきたが、これからは『産・学・官』にさらに『金・民』を加えた 5 つの連携になっていく。市民が主役となり地域に誇りを持ってもらいたい。」と述べました。

続いて、合田隆史文部科学省生涯学習政策局長が、「大学は様々な形で社会に期待されており、それに見合った教育・研究の成果を還元していかなければならない。」と述べ、大学の知的資源を社会に還元していく必要性を示しました。

最後に、小野寺俊茨城県教育委員会教育長が、「自治体や民間も含め、生涯学習の取組みや提供の仕方も多様化している。県民と協働し有意義なものを提供していくことが県の役割である。」と述べました。

開会式終了後は、井上拓也茨城大学地域総合研究所長が、「地域社会と新しいつながり」と題した基調講演を行い、午後は、「新しい公共が中心となる地域づくり」「市民協働を担う人づくり」という 2 つのテーマにて、熟議が行われました。

約 90 名の参加者は、それぞれのグループに分かれ、地域の課題解決に向けて自分たちに何が出来るかについて活発な議論を交わしました。議論の後は、グループごとの発表が行われ、最後に平林正吉文部科学省生涯学習推進課長から総評をいただきました。

宮下芳茨城大学生涯学習教育研究センター長は、「茨城大学もこれから、生涯学習教育研究センターを含めた、地域連携推進部門の再編を予定している。」と述べ、本学がより一層の地域連携を推進していく動きがあることを示し、「熟議 in 茨城大学～市民協働と地域づくり人づくり～」は閉会しました。



開会の挨拶をする合田隆史文部科学省
生涯学習政策局長（中央）



グループに分かれ地域課題について
討議する参加者たち

◆ 教育学部で第2回附属学校フォーラムを開催

平成25年3月2日(土)、教育学部にて、第2回附属学校フォーラム『子どもたちの言葉は今』―聞く力を育てるために―が開催されました。参加者は、大学教員・学生・附属学校教員・公立学校教員・一般等で約150名となり、第1回附属学校フォーラムを大きく上回りました。

開催に先立ち、尾崎久記教育学部長が挨拶し、地域と連携した取組の重要性やより高度な教員養成のための今後の展望について語りました。また、本多清峰水戸市教育委員会教育長の来賓挨拶では、今日的課題に取り組んでいる本フォーラムへの期待や水戸市内中学生の梅まつり観光ボランティアの取組紹介などが述べられました。

続いて、橋浦洋志教育学部副学部長による「学習活動の基礎としての聞く力の育成」と題する基調講演がありました。この中で橋浦副学部長は、〈声〉としての教育力に触れ、〈声ことば〉の重要性から「〈聞き手〉が〈話し手〉を育てる」ことを強調し、最後に「〈聞くこと〉から〈話すこと〉へ」を提言しました。

基調講演後は、昌子佳広教育学部附属実践総合センター准教授がコーディネーターとなり、生越達教育学部教授及び附属や公立の小中学校教諭によるパネルディスカッションが行われました。各パネラーからは、子どもたちの「聞くこと」の現状と課題解決に向けての取組の例などが紹介され、会場との質疑応答も含め、改めて教師自身の「聞くこと」についても考える貴重な場となりました。

これらを受けて、君塚剛文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室室長補佐から指導講評がありました。「聞く力」という今日的課題に、教科や学年の枠を超えて学部と附属及び公立学校教員が一体となって取り組んでいること、また、日々児童生徒に接している中で研究していることの重要性に触れ、「このような地道な取組が学校現場を支え、教育力を高めることにつながっているのだろう。」という感想とともに、今後の茨城大学教育学部の質の高い教員養成と附属学校のミッションとしての先進的な取組への期待が述べられました。

最後に、木村競教育学部副学部長が、教員自身の「聞く力」が「体罰」の未然防止につながることに触れ、「遮らずに最後まで聞くこと」の決意で締めくくり、閉会の言葉となりました。



基調講演をする橋浦洋志教育学部副学部長

◆ 茨城大学と株式会社フットボールクラブ 水戸ホーリーホックが連携協定を締結

本学は、平成 25 年 3 月 3 日（日）に、ケーズデンキスタジアム水戸において、株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホックとの連携協力にかかる協定調印式を開催しました。

これは、水戸ホーリーホックと本学とが相互の特性を生かした連携事業を推進することにより、水戸市及び関係地域の活性化及び両者の一層の発展に寄与することを目的として結ぶもので、当日は、本学から池田幸雄学長をはじめ 5 名が出席し、水戸ホーリーホックからは沼田邦郎代表取締役社長をはじめ 5 名が出席されました。

調印式は、両機関からの出席者紹介の後、協定書への調印が行われました。その後、沼田代表取締役社長及び池田学長から挨拶があり、沼田代表取締役社長からは、「この協定締結を機に、水戸市を始めとした地域社会への貢献に繋がるような活動を進めていきたい」と期待を述べられ、また池田学長からは、「本学学生がこの連携により活力を持ち、ひいては地元の活力に繋がるよう、緊密な連携活動を進めていきたい」と述べられました。今後の具体的な活動については、協議・検討して進めることとし、調印式は終了しました。

また、調印式には、本学内に設立された『水戸ホーリーホック応援ネットワーク』の代表者なども列席し、その活動内容を含めた両機関の連携活動の予定が紹介されました。



協定書調印後の池田学長(左)と沼田代表取締役社長(右)

◆ 「天心・六角堂復興プロジェクト」を報告

本学では、平成 25 年 3 月 11 日（月）に文部科学省で開催された「文部科学省東日本大震災復興支援イベント～教育・研究機関としてできること、そしてこれから～」に参加し、平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災に伴う大津波により流失した「六角堂」（流失前は登録有形文化財）を再建するために、本学により発足された「天心・六角堂復興プロジェクト」の取り組みと復元までの軌跡をパネルや映像を通して紹介しました。

イベントでは、来場者が担当職員によるプロジェクトの説明を熱心に聞き「震災のニュースで六角堂流出を知った。」「再建されてとてもよかった。」「再建された六角堂を見に行きたい。」などの感想が聞かれました。

また、水戸市の茨城県庁で開かれた「東日本大震災 2 周年追悼・復興祈念式典」には橋本昌茨城県知事をはじめ、遺族、県選出衆参国會議員、県議、市町村長ら約 350 人が出席する中、池田幸雄学長が「天心・六角堂復興プロジェクト」による六角堂復元までの道のりを報告しました。



和地貴仁広報係長の説明に耳を傾ける下村博文文部科学大臣



復興に向けた取り組みを報告する池田幸雄学長

◆ 茨城大学東北ボランティア・ツアー ～「2年たった”いま”を感じよう」～

学生のボランティア団体「茨城大学東北ボランティア Fleur」が震災を風化させないために、被災地に足を運び、今何ができるかを一緒に考えることを目的に、ボランティア・ツアーを企画しました。

Fleurのボランティア・ツアーは今回で、第3回目となり、平成25年3月13日（水）～3月14日（木）の2日間、岩手県の南三陸・女川・雄勝・石巻で海岸清掃・草取り・ムスカリの球根植え等のボランティア活動を行いました。

なお、ボランティア・ツアーは平成25年1月19日（土）に第1回目、2月18日（土）に第2回目を開催しており、今後も継続していく予定です。

○ お花の成長とともに被災地の復興を見届ける（Fleur代表：滑川裕乃）

宮城県野蒜地区に、かんぽの宿に守られ唯一残っている家屋があります。震災の状況が分かるようにと、持ち主の方が自宅を開放してくださり、その方とのご縁でお庭にムスカリの球根を植えてきました。また、その球根と同じものを水戸キャンパス内の花壇に植え、被災地と同じ花を咲かせることにより、震災を忘れない気持ち、被災地との絆を大切にします。

○ *Fleur*（フルール）とは？

Fleur（フルール）は「震災を風化させたくない」「茨大生がボランティアに行くきっかけを作りたい」という思いから、平成24年12月から活動している非公式サークルです。

また、Fleur（フルール）には、フランス語で「花」という意味があります。花植えを活動の中心として、花の成長から被災地の復興を感じ、次の世代にも復興への想いを繋げていきたいと考えています。



海岸清掃の様子



花壇に植えたムスカリ（水戸キャンパス）

◆ 農学部主催による地域連携シンポジウムを開催

農学部は平成 25 年 3 月 22 日（金）、阿見キャンパスにおいて、『震災から二年：再生可能エネルギーの創成と地域の土と水の再生に向けて』と題した地域連携シンポジウムを開催しました。

今回のシンポジウムは、東日本大震災から 2 年を経過した今、被災農耕地の再生に寄与するとともに、耕作放棄地の解消やエネルギーの安定供給などに貢献する作物由来のバイオ燃料に着目し、今後のバイオ燃料の生産および活用の動きやスイートソルガムを利用した環境修復効果、さらに、放射性物質による農耕地の汚染およびその対策等について議論することを目的としたものであります。シンポジウムには、大学や研究機関の研究者、自治体関係者、民間企業、地域の農家や市民など約 50 名が参加しました。

始めに、農学部新田洋司教授によるシンポジウムの開催趣旨説明がありました。続いて、農学部塩津文隆講師の「バイオ燃料生産の動向および茨城大学バイオ燃料社会プロジェクトの活動」と題した講演では、世界各国におけるバイオ燃料生産の動向および同大学が実施しているバイオ燃料社会プロジェクトの一連の研究が紹介されました。宮城大学中村聡准教授の「津波被災農地でのスイートソルガム栽培による環境修復の試み」と題した講演では、津波被害を受けた農地の再生に向けた取り組みについての報告がありました。農学部内田普准教授の「総合評価から見た再生可能エネルギー」と題した講演では、ライフサイクルアセスメントを用いたバイオマスエネルギーの評価手法についての説明がありました。宮城大学木村和彦教授の「放射性物質による農地と農産物汚染」と題した講演では、放射性物質による農地汚染の現状およびその対策方法についての紹介がありました。最後に阿見町の中村政人生活産業部放射能対策室室長補佐の「阿見町の放射能対策について」と題した講演では、震災以降、阿見町が実施してきた様々な放射能対策についての説明がありました。

総合討論では、スイートソルガムを利用した東日本大震災への復旧・復興に向けての可能性やバイオ燃料生産の普及への取り組み、放射性物質に対する今後の対応についての意見が活発に交わされ、盛況のうちにシンポジウムは閉会となりました。



シンポジウムの演者らによる総合討論



シンポジウムに参加した研究者、自治体関係者、農家、市民ら

◆ 本学が中心となったボランティア団体に 文化庁より感謝状が贈呈されました

平成 25 年 3 月 25 日（月）、東日本大震災被災文化財等救援・修復活動への功労者に対する文化庁長官感謝状贈呈式が独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所で行われ、「茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク」（代表：茨城大学人文学部 高橋修 教授）が表彰されました。

文化庁長官感謝状は文化庁が、東日本大震災で被災した美術、工芸品や古文書などの文化財を移送して補修、保全する「文化財レスキュー事業」に参加、協力した団体・個人に対し贈呈するものです。この度、本学の学生が実働の中心となり、本学教員の協力のもと行った文化財救援活動が評価されました。



感謝状を贈呈された「茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク」代表 高橋修 教授

◆ 平成24年度卒業式

平成25年3月26日（火）午前10時から茨城県武道館において、学長、役員はじめ来賓等の参列のもと、平成24年度茨城大学卒業式が挙行されました。

式は、本学管弦楽団の前奏に始まり、池田学長から学部、大学院および専攻科の卒業生、修了生の学部等総代に学位記、修了証書が授与され、学長告辞、来賓祝辞、卒業生・修了生総代による答辞と続き、最後に参列者全員による校歌斉唱で閉式となりました。卒業生・修了生総代 田中勇氣（農学部）からは、「定期試験も研究も、そして大地震も、苦しい時は一緒に歯を食いしばり、一緒に成長する友人がいた。この友人たちは一生の宝物です。」と答辞が述べられました。

なお、今回巣立った卒業生・修了生は、2,115名でした。

◆ 平成24年度卒業式告辞

茨城大学長 池田幸雄

すっかり春めいて参りました。桜の花が見頃を迎えている今日この頃でございます。本日、茨城大学を卒業される2,115名の皆さん、ご卒業本当におめでとうございます。また、ご列席のご家族の皆様にも、心からお祝いを申し上げます。



さて、2年前の平成23年3月11日に、日本は「未曾有の超巨大地震」を経験しました。その地震にひき続いた「想像を絶する大津波」は、2万人以上のかけがえの無い尊い人命を

奪い、かつ、多くの家屋、施設、学校、職場などを容赦なく破壊致しました。しかしながら、この「東日本大震災」も2年が経過し、日本は冷静さを取り戻すに至りました。この時点で、我々は「東日本大震災」から得た教訓を総括すると共に、2度とこの様な大災害を起こさない様、強く決意する必要があります。

まず、3.11の東日本大震災を通じて、「日本人の素晴らしさ」を多く発見する事ができました。そのうち、特筆すべき「日本人の素晴らしい長所」について3つ程お話ししたいと思います。

第1に、東北地方の太平洋沿岸に大津波が来襲した時、多くの住民は避難を行いました。一部の人々は、危険をも顧みずに職務を全うし続けたため、その命を失った方々が多く居られました。彼らの行動は賞賛に余りあるものであり、「日本人の責任感の強さ」の象徴です。私達は、彼らの使命に殉じた尊い犠牲を決して忘れるべきではありません。

第2に、震災直後に生じた食料不足、ガソリン不足、水不足等にも関わらず、市民は常に秩序を守り、黙々と行列に耐えました。この「日本人の我慢強さ」は外国の新聞にも取り上げられ、称賛されました。諸外国では、このような大災害に際して、暴動が発生して商店を襲撃する等の事態がしばしば起こり



ますが、日本ではそのような事例は皆無でした。多くの日本の商店等は市民の便宜を図るべく、できる限りの支援を実行しておりました。日本人の「共同体意識」が無意識のうちに発揮され、「日本人の素晴らしさ」を改めて発見する事が出来ました。

第3に、今回の大震災に際し、若者のボランティア活動が大変盛んでした。多くの若者が、「困っている被災者」の役に立ちたいと考え、純粋な気持ちでボランティア活動をする姿に深く感銘を受けました。本学の学生諸君もボランティア活動に積極的に参加し、被災者を一生懸命に応援しておりました事、私は大変強く心を打たれました。このような若者の心意気に接し、今後の日本は「必ずや健全に発展するに違いない」と確信した次第でございました。

一方、地震等についても、多くの「新しい知見」がありました。3.11の超巨大地震や大津波は、最新の科学技術を駆使して調査が行われ、地震や津波に関する多くの新しい事実

が明らかになりました。従来、東日本の太平洋沖地震は、「三陸沖地震や宮城県沖地震などの震源域」が独立に活動すると考えられておりましたが、3.11の地震では、これらの独立した震源域が6つも連動して「マグニチュード9の超巨大地震」になりました。この連動は今までに全く想定されておらず、日本の地震学者に大きな衝撃を与えました。



現在、日本で一番心配されている地震は、「南海トラフ連動型地震」です。この南海トラフ沿いの地震には、東海地震・東南海地震・南海地震の3つの震源域があります。このうち、東海地震は予想された「地震発生周期」を既に超えていますので、30年以内の地震発生確率は大変高く、現在88%にもなっています。この東海地震が引き金になって、3つの地震が連動して活動すると仮定した場合、3.11の超巨大地震と同様に、「マグニチュード9クラスの超巨大地震」になります。

内閣府の作業部会は、最近、この「南海トラフ連動型地震」が発生した場合の「被害予測」を公表しました。この場合、犠牲者数は最大32万人にも達し、経済的被害額は最大220兆円にも上ります。東日本大震災と比べると、その10倍以上にも相当し、まさに「国家的危機」に陥る可能性があります。

2番目に心配されるのは、首都東京での地震です。90年ほど昔の大正時代に「関東大震災」を経験しましたが、現在では、この巨大地震の発生確率は低いと考えられています。しかし、「活断層に由来する直下型地震」の周期は数十年程度ですので、東京には、この「中規模の地震」が発生する可能性が高いと考えられています。直下型の地震は、マグニチュードが小さくても震度が大きく、大震災に繋がる可能性が大いにあります。

自然災害に関する世界的な保険会社である「ミュンヘン再保険会社」は「世界各都市の自然災害リスク」を算出していますが、東京・横浜が断トツの世界一になっております。残念ながら、もっともであると思わざるをえません。

私達の住む「日本列島」には、巨大地震や大津波は勿論のこと、「活発な火山や凄まじい台風」などによって毎年大きな被害をこうむっています。私達日本人は、「世界一自然災害の多い日本列島」に住み、日本の首都は、「世界一自然災害リスクの高い都市」なのです。

この様に、日本列島は「多くの自然災害」に遭遇する運命にあります。この日本列島に住む日本人にとって自然災害は決して避けて通る事はできません。然らば、我々日本人はこの運命をどのように乗り切っていくべきでしょうか？ 私は、次の 3 項目を心掛ける事が最も大切であると思います。

第 1 に、我々日本人は、「日本列島が世界一危険な地域」であるとの自覚を持ち、いざと云う時は、狼狽える事なく、毅然として自然災害と戦う覚悟が必要です。

第 2 に、「自然災害に対する知識」を広く学ぶと共に、叡知を結集して安全対策を確立すべきです。更に「防災の訓練」を重ねる事も大変必要です。これらの自然災害は忘れた頃に突然やって来ますので、普段から常に心掛けておくことが肝要です。

第 3 に、日本人は「自然災害に強い社会」を作り上げる事が極めて重要です。全国の建築物の耐震化を進めるのは当然ですが、それだけでは不十分であり、過密都市の人口の分散が不可欠です。現在の東京には人口が集中し過ぎていますので、首都機能を分散して東京の人口を大幅に減らすことが必須です。

以上の 3 項目を、是非、忘れないで頂きたいと思います。これから社会人となる諸君は、日本社会の「強い点と弱い点」を正しく理解したうえで、日本列島の自然災害と戦う覚悟を心に秘め、安全で明るい日本社会の一層の発展を目指して、頑張ってくださいと思います。すべては、若い諸君の双肩に懸かっています。



最後に改めて皆さんのご卒業を祝い、これからの皆さんのご活躍とご健康を心から祈って、饒（はなむけ）の言葉と致します。本日はご卒業本当におめでとうございます。

◆ 平成24年度 退職者永年勤続者表彰式・懇談会を開催

平成24年3月をもって本学を退職された職員を対象とした永年勤続者表彰式が平成25年3月28日（木）に事務局第2会議室で行われ、役員等の出席のもと、長年にわたって勤務された被表彰者一人一人に池田学長から表彰状が手渡され、多年の勤務に対するねぎらいのお言葉がありました。

表彰式に引き続き、本学を退職される大学教員を交え、昼食を取りながら懇談会が開催され、学長から退職記念品が贈られるとともに、退職教職員を代表して、元副学長の田中重博教授及び理学部長の堀良通教授からご挨拶があり、これまでの様々な思い出などを語り合いながら終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われました。



表彰式後の記念写真

被表彰者（職種—所属—職名—氏名 50音順、敬称略）

●事務系（事務）職員

栗田 稔（留学交流課長）、永久幸司（学生生活課専門員）、
寺山一見（理学部事務部事務長）、花田実知子（工学部事務部事務長補佐）、
助川 保（工学部事務部専門職員）

●事務系（図書）職員

佐藤尚武（学術情報課長）、野原晴美（学術情報課 課長補佐）

●技術系職員

関根 守（機器分析センター 技術専門職員）

以上 8 名